

平成31年4月1日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人 日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201880252

氏名 肥後 晴尚

(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

1. 派遣先: 都市名 ライデン (国名 オランダ)
2. 研究課題名 (和文) : 古代エジプトの葬祭文書研究-ライデン大学オランダ近東研究所のアーカイブ資料から-
3. 派遣期間: 平成30年4月1日～平成31年3月31日 (365日間)
4. 受入機関名・部局名: ライデン大学 オランダ国立近東研究所
5. 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2ページ程度を目安に記入すること)

申請者は、ライデン大学オランダ国立近東研究所が所蔵する「コフィン・テキスト」の原資料を撮影したアーカイブ資料の精読を通して、厳密な資料批判に基づく「コフィン・テキスト」の内容の分析・検討を実施した。「コフィン・テキスト」は、20世紀前半から中ごろにかけて多数の木棺資料に記された象形文字のテキストをA. de Buckが校訂・編纂した校訂資料の総称である。この資料は、校訂内容や呪文の配列に編纂者の解釈や意図が含まれる点や、原資料の不明瞭な箇所に独自の復元がなされるという問題を含みながらも、エジプト学研究者の一次資料研究の対象として利用してきた。本研究では、de Buckが校訂資料の編纂にあたって利用した実際の木棺資料の写真アーカイブから、彼の校訂資料の不明瞭な点を再検証し、厳密な意味における資料研究の重要性を再認識した。本研究期間中に選定したアーカイブ資料上のテキストの精査は概ね完了しており、現在はその成果を基にした英文・和文の学術論文を執筆中である。

また、受入教授であるO. E. Kaper教授と定期的に議論の場を設け(2018年4月、5月、7月、8月、10月、12月、1月、2月、3月)、アーカイブ資料研究の進捗状況を報告し、研究成果を発展的に活用するための議論の場を設けた。特にB1Cの木棺資料上で確認した特殊な「二柱のマアト」の文字の発見は、[6]に後述する木棺研究の発展の大きな契機となった。

その一方で、世界でも有数のエジプト学研究機関であるライデン大学でエジプト学の学理を学ぶために、申請者は"Demotic Papyrology"や"Klassiek Egyptisch"といった発展的なエジプト語の授業に参加し、教員や学生と文法理論や文字の解釈に関する議論を行った。これらの授業を経て、申請者は国際水準のエジプト学の知見を習熟させるとともに、欧米の研究の場で活躍する教授や若手研究者とのネットワークを形成した。

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2ページ程度を目安に記入すること)

本研究プログラムの受入教官であるO. Kaper教授との相談の上、本研究で得られた研究成果は2019年6月にスペインで開催される"Current Research Egyptology 2019"(発表内定済)および同年8月にオランダで開催される"6th International Conference for Young Egyptologists" (審査中)で発表する予定である。また、成果の一部は2019年秋に開催される日本オリエント学会および日本宗教学会の年度大会でも発表する予定である。また、欧文・和文で論文を現在執筆中であり、2019年度内の出版を目指している。

本研究で実施したアーカイブ資料の研究において、最も重要な発見は、木棺資料B1C上の「コフィン・テキスト」に記述された「二柱のマアト」と呼ばれるマアトの概念の特殊な形態に付記された決定詞の組み合わせである。de Buckの校訂資料上では曖昧な表記であったこの記述は、アーカイブ資料の精査により、男性と女性の決定詞(語彙の意味を決定する要素)で記されていることを確認した。この描写は、「コフィン・テキスト」の利用されたエジプト中王国時代より後の時代((新王国時代以降)の資料にのみ確認される特異な事例であると認識されていた。しかしこの発見により「二柱のマアト」を男性と女性の一組とする描写がより以前に存在したことが証明される。この発見を契機として、申請者は、初期王朝時代の「パレルモ・ストーン」、古王国時代の「ピラミッド・テキスト」から中王国時代の「コフィン・テキスト」を経て、新王国時代の「アム・ドゥアト」および新王国時代以降の「死者の書」上の「二柱のマアト」描写の比較・考察することで、エジプト王朝史全体における「二柱のマアト」の理解を目指す研究を次の研究段階に設定している。この研究の遂行により、未だ最終的な結論に至っていないマアトの概念が倍加(増加)した原因の解明や、その倍加の根幹にあるとされる古代エジプト人の「二元論」の思想の理解に大きく寄与することが期待される。

さらに、「二柱のマアト」の研究を進める一方で、申請者は、2019年3月にライデン大学のKoen Donker van Heel博士から、オランダ国立古代博物館に所蔵される古代エジプト中王国時代の木棺資料の蓋部分に記述された未発表のテキストの読解研究の実施を提案を受けた。この提案は、本研究プログラムにおける「コフィン・テキスト」のアーカイブ資料に着目し、厳密な資料の読解を目指す研究が評価されたことを示唆する。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2ページ程度を目安に記入すること)

本プログラム採用される以前の申請者の研究は、日本国内において活用できる資料が限定されていた点や、国内に十分な議論を交わせる研究者が極めて少ない点から、研究の客観的な評価を受ける機会が少なく、研究の今後の展望がやや不明瞭な状況にあった。本プログラムの研究におけるアーカイブ資料の精査に基づく資料研究の実施や、数多くのエジプト学の専門家や高い研究水準にある学生との議論は、これまでの申請者の研究課題を複数の視点から浮き彫りにするだけでなく、特異なマアトの形態である「二柱のマアト」を探求する研究の方向性を示した。また、世界的なエジプト学の研究機関であるライデン大学で実施される授業に参加することで、エジプト学に必要とされる言語や資料の読解の知識と技能を飛躍的に向上させると同時に、近年のエジプト学界の動向を窺うことができた。特に、シャンポリオンの解読から現在に至るまで2世紀以上にわたって繰り広げる古代エジプト語(中期エジプト語)の文法理論の議論が実際の研究の場でどのようになされているのかを窺い知ることで、エジプト語の文法理論を見つめ直し、その理解をさらに深める契機となった。。

さらに、本研究期間中は、世界各国の研究者との交流の機会に恵まれ、オランダ、イギリス、ドイツ、イタリア、デンマークなど、欧米各国で活躍する研究者との人脈を形成することができた。このネットワークは、今後の各国の博物館・研究機関における資料調査の実現や共同研究の実施に大きく役立つ重要な財産となると考えている。

今後の研究において、申請者は本プログラムを通して培った国際水準のエジプト学研究の能力と新たな研究視点、そしてヨーロッパ各国の研究者との人脈を活かし、更なる研究の深化を目指すとともに、日本国内のエジプト学の発展に寄与したいと考えている。